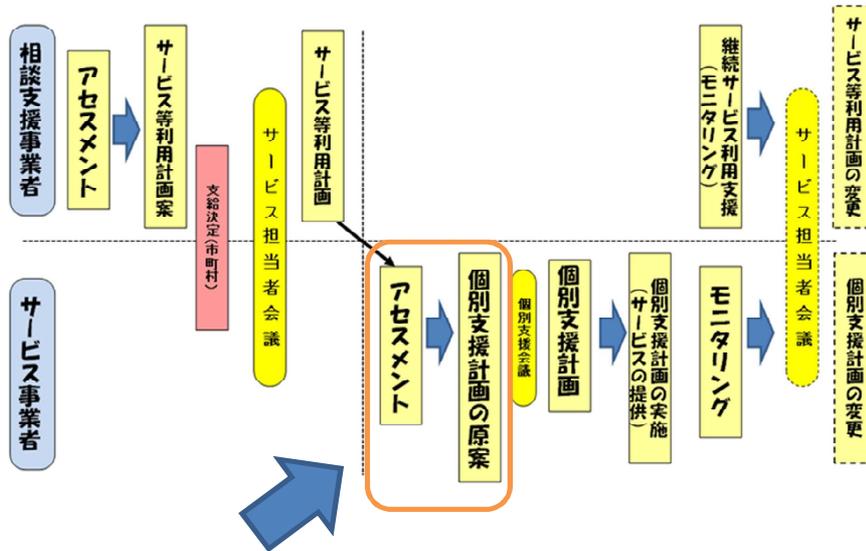


第3回研修会参考資料

(1) 障害児支援利用計画と個別支援計画の関係

- 障害児支援利用計画については、相談支援専門員が、総合的な援助方針や解決すべき課題を踏まえ、最も適切なサービスの組み合わせ等について検討し作成する。
- 個別支援計画については、サービス管理責任者等が、障害児支援利用計画における総合的な援助方針等を踏まえ、当該事業所が提供するサービスの適切な支援内容等について検討し作成する。

指定特定相談支援事業者(計画作成担当)と障害福祉サービス事業者の関係



今日の研修では、サービス事業者としてアセスメント・個別支援計画の作成を行います。

(2) 個別支援計画の作成にあたって

- ① 個別支援計画の作成にあたっての視点、留意点
 - ・保護者の意向を取り入れる。(保護者の望み、心配や不安、困っていることなど)
 - ・苦手なことや課題となっていることだけではなく、子どもの強みや得意なことを活かす。
 - ・問題となる行動があるときはその背景に隠れている子どもの苦手さや困難さに対する支援を考える。
 - ・人とのかかわり方(親、慣れた大人、子どもどうしなど)やコミュニケーションの取り方の特性(子どもからの発信の仕方や、他者からの発信の受け止め方など)など、その子の発達の特性を捉えて作成する。
 - ・就学に向けての支援(親の意向、日常生活動作、他の機関との連携など)を取り入れる。
 - ・発達支援：家族支援：地域連携(3：1：1)の3つの視点を取り入れる。
 - ・わかりやすく文章化する(子ども・保護者の立場に立った表現・ポジティブな表現・具体的な表現)
 - ・長期目標(1年)と短期目標(3～6か月)を定める。
 - ・支援の目標については、優先順位・支援期間を示す。
 - ・一貫性のある内容となるようにする。
- ② モニタリング
 - 個別支援計画は必ず定期的に見直しを行う。
 - 目標を達成できないときには、その原因を検討し、次の方向性を示す。
- ③ 個別支援計画の変更
 - モニタリング・サービス担当者会議の内容を踏まえ、個別支援計画の修正を行う。

事例検討

事例を通した個別支援計画の作成

○対象児

A君、男児、年長（5才）

○診断名

広汎性発達障害／自閉スペクトラム症

○家族構成

父（30代）・母（30代）・姉（小3）・本児

○生育歴

周産期の大きな問題はなし。

乳児期の発育状況に大きな問題はなく、11ヶ月で歩き始めると同時に走り始め、目が離せなかった。離乳食のころから好き嫌いが激しく、嫌なものは頑として受け付けなかった。

発語は、1歳半には物の名前が数語出ていた。日常的な言語指示は全く通じないわけではないが、一方的なことが多かった。

親は姉に比べてちょっとマイペースな子で、育てにくい印象を持っていたが、男の子なのでこんなものかな？と思っていた。

1歳半健診で、母は偏食の多さやマイペースさを相談。簡易の発達検査上では、特に大きな遅れはみられず、関わりのアドバイスがあった程度で終了。

3歳児健診で、再度相談したところ、さっぽこども広場を紹介される。さっぽに数回通い、そこで「集団に入った方が良い」とのアドバイスを受け、比較的少人数の幼稚園の年少クラスに入園。

年少のクラスは15名で担任は1名。自由保育が中心で、本児のペースで遊んでおり、特に大きなトラブルなどなかった。年中のクラスは30名で、担任が1名。年度の後半ごろから設定保育が入ると、製作などの時間に座っていられず部屋から出る、設定遊びで他児を突き飛ばすなどの行動が目立ち始める。そのような時は担任以外の職員が補助に入ったりするが、他のクラスもあり、常時補助に入れる体制ではない。

幼稚園からの指摘を受け、保護者がさっぽの担当者に相談し、そこで小集団での療育を勧められ、年長から幼稚園終了後の週2回と、土曜日の支援事業所の利用を開始した。

○保護者の関わり

父親は仕事が忙しく、普段は母親が中心に育児を担っているが、父母ともに療育に熱心。診察や相談機関には父母揃って来ることが多い。

両親は本児のマイペースさや偏食、外出先ですぐどこへでも行ってしまおうとすることなど気にしつつも、家の中ではブロックやトミカで集中して遊ぶ時もあり、手におえないと感じるほど困ることは少なかった。言葉も出ていることから、幼稚園に通うようになれば変わるのではと思っていた。幼稚園での様子を聞き、他の子に怪我をさせないか心配をしている。

来年度の就学に向けてのことも考え始めていて、現段階では支援級で手厚くかかわってもらおうほうがよいかと思いつつ、今後の成長で落ち着きが出てくれば、普通級に通えるのではという思いもある。

事例検討

事例を通した個別支援計画の作成

○保護者の要望

- ・もう少し落ち着いて物事に取り組んで欲しい。
- ・お友だちと仲良く遊んでほしい。
- ・食べ物の好き嫌が多いので、食べられるものが増えてほしい。

○事業所での様子（現在まで5回の利用）

初来所時の様子は、母親と離れてもあまり気にする様子はなく、全ての部屋を開けては入り、施設の中を探索するなど動きが多かった。初めての職員に対しても物怖じせず話しかけてくるが、「幼稚園にもこのブロックある。」「お父さんは会社にいった。」など、話題が次々変わり、動いているか一方的に喋っているという様子であった。自由遊びの時間、他の子とおもちゃの取り合いになって使えず、「おかあさん」と言いながら室内を見渡し大泣き。落ち着くまでの数分間、担当職員1名が他の子と少し離れたところで対応する。

（利用開始から5回目時点の様子）

排泄は自立。ただし大便是きれいに拭けているか確認が必要である。身支度は、服は自分で脱ぐことができる。着ることに関しては、ボタンがついている上着は着ても留めないままできて、職員が声をかけるとやろうとはするが時間がかかり、1、2ヶ所留めると「もういい」と言ってその場を離れる。

食事では、スプーン・フォーク、箸（握り箸）を使うが、こぼすことが多い。他児の声や動きが気になり、立ち歩く様子も見られる。その際職員が「〇〇くん、座ろうね」等の声をかければ一時的に席に戻ることが出来る。また偏食が多く、嫌いなものを指でつまんで器の外に捨てたり、残したりし、食べない様子が見られ、苦手なものを職員に促されると「ピーマン、やだ！」など叫ぶように言う。一方、「△△ちゃん、おいしそうに食べているね。」などと声をかけると、その子の食べる様子を見つめる姿がある。

自由遊びの時間では、通い始めたころは、走りまわったり、次々と遊具を出したりして、落ち着いて遊ぶことができなかった。「片付けの時間ですよ」などと全体に向けた言葉だけの指示では動かず、傍に行くと声をかけると「今使ってる」「まだ遊ぶ」と叫んだりする。

5回目の現在は、初回泣いた時に対応した担当職員が傍にいと落ち着いて遊ぶことが多い。職員が手にしている玩具をみて、「それ使いたい」と言ったり、「トミカだして」と言葉で要求することが出来たり、「〇〇ちゃんにあげてね」など間に入れば、他児に使っていない玩具を貸すこともできる。その際、職員に褒められると嬉しそうにし、一方的ではあるが違う玩具も貸そうとする様子が見られる。また、担当職員が他の子とくすぐり遊びをしていると、その様子を見ていたので、「やってみる？」と誘うと傍に来て、楽しむことが出来た。片付けは担当職員が「〇〇くん手伝って」と声をかけると、応じる姿も出てきた。

好きな遊びは、家庭同様トミカやブロック。ブロックはかなり複雑な形でも作れる。また、自分で作ったブロックの車に指人形をのせて、「今日は動物園にいきます。」と言いながら、動かして遊ぶ姿もある。ただ、他児の声や玩具で遊ぶ姿を見ると、そちらにいつてしまい、1つの遊びに長い時間取り組むことは少ない。また、遊んでいる物を取られる等遊びを邪魔されると、泣くことが多く、咄嗟に手に持っている物を投げたりする時もある。

事例検討

事例を通した個別支援計画の作成

グループ活動では、サーキット遊びが大好きで、滑り台やトランポリンなどで体を動かすことを楽しんでいるが、他の子が遊んでいる時に、順番を待ちきれず押して割り込んでしまうことがある。その際、職員が制止するため「ダメ」と声を掛けると、高い声を上げ、話しをしようとして職員が近づくと部屋の中を逃げたり、物にあたる等の様子が見られる。

1対1の個別的な課題場面では当初は落ち着かない様子があり、机といすを担当者が用意してもすぐには座れず、少し課題をやっては立ち歩いていた。ただ、集団の場面よりは指示が入り、部屋から飛び出さずに遊ぶことは出来る。現在は、担当者の声かけで座って「始めます」と挨拶をし、ある程度の時間は折り紙や絵カード合わせなど、一つの課題に座って取り組むことができるようになった。

児童発達支援計画

平成 26 年〇月〇日作成

作成者 〇〇グループ

利用児氏名

生年月日 平成〇年〇月〇日

○到達目標

長期目標	(1年)
短期目標	(3～6か月)

項目	到達目標	支援方法 (留意事項)	優先順位	モニタリング期間
発達支援				〇か月
				〇か月
				〇か月
家族支援				
地域連携				
総合的な支援方針				

保護者署名

印

※ 太枠部分の作成をお願いします。